

## 四、時事俳句

一八六

膺懲の艦に吹きそふ野分かな  
雲の峰敵を散らして日の御旗  
何のその翔る野分の爆撃機  
雲の峰敵都を襲ふ五機六機  
くすのきの神も出でます國の秋  
熱炎や歡呼に送る赤喇叭悲し今日も尊き一柱  
町角に千人針の軍國調  
皇軍の勝利常に銃後の守りあり  
炎天になほ立ちつくす千人針  
夕涼み北支の話にふけにけり  
一筆に赤誠こめる千人力量  
千人力一字一字に至誠あり

五年

上杉

博

クククククククククククククククク  
田中太郎山田久穂木一之佐野輝夫藤井正敏小田久男  
中川浩次淺尾敏靖中嶋聰一雨夜良明

夕涼み寄れば戦の話かな  
萬歳の聲に忘るゝ暑さかな  
てつかぶとゆだる卵や偲ばるゝ  
兵士過ぐ村の停車場日のさかり

## 五、時事漢詩

### 膺懲暴支歌

贊助員 和田利男

驕虜狎恩侮神國。  
一切齒修好幾春秋。  
孔皇軍遂執膺懲劍。  
我軍由來義是崇。  
銀翼翔空戰車行。  
我兵由來義是崇。

飛踊況斷恃隱濫  
丸躍蔣平乎衆忍弄遠交近攻策。  
縱應馮欲挑冀覺隣邦惑。  
橫召兮拂百憂。  
草誓赤匪輩。  
木玉碎。

一八七

征戰先收北平塞。  
上海敵壘堅若鐵。  
地利不如人心和。  
英米讞言不足傷。  
東海有國大日本。  
君不見旭旗往處壺漿迎。  
河北萬里仁風洽。

### 雁門關占領

天兵百戰不辭艱。  
一路長驅如破竹。  
時事書感  
皇軍遂起捷音頻。  
東亞和平是我志。

### 送岩佐先生出征

醜虜未知皇軍雄。  
修和唯有膺懲劍。  
恩師今日上征途。  
諸生呼壯送舟航。

山岳疊重峻又峻。  
請看將士衝天氣。  
北支戰線  
猛鷲部隊

長驅連翼襲西天。  
擊墜投彈三閱月。  
勿道忠魂不復返。  
戰場日暮轉蕭條。

### 弔皇軍勇士

千秋萬古美名昭。  
勇士空留一墓標。

一八九

五年橫正勇  
吉

允文允武仰天皇。  
猛攻京城下盟可必。  
允亞洲和平誰克當。  
允滿天瑞雪頤休明。  
子來恰似堯舜氓。  
南京城下盟可必。  
長驅擊破太原營。  
砲擊殷殷欲壞山。  
旭旗高閃雁門關。  
和衷致力神州民。  
排擊百艱氣益振。  
五年諫山勝保

### 贊助員 小川堯平

五年淺尾敏靖

五年大曲直介  
忽奪敵營旭旆翩。  
長城牢固聳雲邊。  
宜斬頑惡掃妖祲。  
歲修偏希武運長。  
意氣衝天起懦夫。  
左提右挈約遂空。  
五年  
猛鷲武威誰比肩。  
全支收得制空權。

五年  
勇士空留一墓標。  
千秋萬古美名昭。

一八九

## 附錄 本校關係の應召者從軍者芳名錄

一九〇

### 現職員

磯尾哲夫先生

岩佐修理先生

### 舊職員

榎本萬吉先生(和歌山縣立耐久中學校在勤)

### 卒業生

(○印ハ現役從軍)

第一回生	○中島靜夫君	山本雅重君	美濃部博君
第二回生	○中島美久君	米村忠雄君	木原正巳君
第三回生	○松本幸雄君	山崎準次君	山本愛治君
第四回生	○阿江勇君	井出新太郎君	齋藤實君
第五回生	○森進君	吉川武君	向山茂夫君
第六回生	○奥西丈夫君	高馬夏彥君	山村正夫君
第七回生	○吉元主税君(負傷)	森田忠實君	鷲尾義治君
第八回生	○水澤清久君	谷口英雄君	大村重雄君
第九回生	○古阪敏雄君	江川義弘君	岩佐修理先生
父	○宇野素弘君	○岸口武彦君(負傷)	木原正巳君
五年	○前川文俊君	○綱島久雄君(戰傷死)	大村重雄君
父或兄	○有馬瑞樹君	岡田一幸君	鷲尾義治君
學年別	○長谷川寛君	○多田仁三君	向山茂夫君
父	○坂元保太郎君	片岡一郎君	山村正夫君
野	○水田勝治君	太田康雄君	鷲尾義治君
田	○井上恒喜君(負傷)	阿部秀雄君	大村重雄君
秀	○馬場信雄君	三宅壯一君	岩佐修理先生
造殿	○古田國雄君	○高原四郎君	木原正巳君
生徒父兄	○竹内淳三君	○吉田功君	大村重雄君
父	○古田廣信君	○八木田政夫君	鷲尾義治君
野	○高山	○瀬川欣宣君	向山茂夫君
田	○沈君	○吉田功君	山村正夫君
秀	○岩野四郎君	○高藤昇君	鷲尾義治君
逸	○山名一夫君	○三笠隆三君	大村重雄君
生徒名	○原源吾君	○藤本輝文君	鷲尾義治君
父	○山名一夫君	○高藤昇君	大村重雄君
野	○籠谷正直君	○瀬川欣宣君	鷲尾義治君
田	○森一夫君	○吉田功君	大村重雄君
秀	○奥田惣右衛門君	○高藤昇君	鷲尾義治君
逸	○金光丈夫君	○高藤昇君	大村重雄君

第六回生	○林治一君	○宇野素弘君	足立享君
第七回生	○新本憲次君	○前川文俊君	中村滿君
第八回生	○安田利喜男君	○有馬瑞樹君	中村滿君
第九回生	○坂元保太郎君	○長谷川寛君	中村滿君
父	○水田勝治君	○藤本輝文君	中村滿君
五年	○井上恒喜君(負傷)	○高藤昇君	中村滿君
父或兄	○馬場信雄君	○三笠隆三君	中村滿君
學年別	○古田國雄君	○高藤昇君	中村滿君
父	○竹内淳三君	○吉田功君	中村滿君
野	○古田廣信君	○高藤昇君	中村滿君
田	○高山	○高藤昇君	中村滿君
秀	○沈君	○高藤昇君	中村滿君
逸	○岩野四郎君	○高藤昇君	中村滿君
生徒父兄	○山名一夫君	○高藤昇君	中村滿君

一九一 野田秀逸

" " " " " 一 " " " " " 二 " " "

年

" " " " 三 " " " " " 四 " " " "

年

父 兄 父 父 兄 兄 父 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄

岡	竹	馬	福	佐	横	小	山	山	横	小	小	森	中	國	井
田	本	屋	部	貫	山	阪	口	口	田	西	川	野	寶	手	
政	繁	知	八	平	宇	真	誠	泰	正	文	地	喜	一	平	弘
吉	殿	忠	殿	郎	一	三	殿	一	史	夫	男	敬	夫	二	海
吉	殿	一	殿	一	殿	三	殿	一	殿	夫	殿	夫	殿	海	弘

兄 兄 父 兄 兄 兄 父 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄

根	宗	山	新	鳥	皆	大	松	春	松	古	藤	山	森	大	奧
津	國	田	谷	越	川	野	尾	名	本	阪	原	田	山	谷	田
貞	雅	勝	勝	良	高	繁	福	喬	活	敏		淺	武	惣	右衛門
義	通	郎	吉	男	郎	廣	造	太	敏			豐	肇	男	二
吉	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	雄	太			殿	殿	殿	殿

一九三 岡 竹 馬 福 佐 橫 小 山 橫 小 小 森 中 國 井  
 田 本 屋 部 貫 山 阪 口 田 西 川 野 寶 手  
 嘉 宗 晋 秀 真 活 忠 重 文 三 喜 成 文  
 郎 春 一 雄 平 水 男 男 夫 郎 貞 夫 雄 夫 澤

一九二 根 宗 山 新 鳥 皆 大 松 春 松 古 藤 山 森 大 奧  
 津 國 田 谷 越 川 野 尾 名 本 阪 原 田 山 谷 田  
 貞 嘉 勝 武 良 志 繁 德 俊 治 幸 正 敏 信  
 男 夫 英 士 一 朗 美 郎 介 朗 雄 勇 稔 藏 郎 夫

## 編輯後記

◆國民精神總動員は、今や第三期に入つて愈々重大性を加へつゝある。此の記念出版はその期間に於ける校友會の事業の一つとして營まれた。主として國漢科が中心となつたが、修身、公民、地理歴史科に負ふ所も少くない。

◆表紙に賀須井會長御揮毫に係る題簽を頂いて飾ることが出來た。

◆編纂締切の後、皇軍は益々各地に神速的な進出を成し着々戰果を收め、今や北支には各種の治安維持自治會が產れ日を追うて明朗化されつゝあり、又上海の海關郵政電信の接收については早くも英米側は恐慌を來してゐるし、一方陥落の危機に瀕した南京に於ては蔣介石白崇禧共產派の對立は漸次激化の色を示し戰局の進展と相俟つて事態は益々複雑化しようとしてゐる。

◆從つて支那事變に關する經つた記錄としては、事變落着後の集大成に俟つ外はないが、茲にはその進行途上に一線を劃して代表的事項を摘要、生々しい材料を一應並べることを試みたに過ぎない。

◆由來國民精神の歴史を顧るとき國家意識のより深き自覺には週期があつた様であるが、現在國家は擧げてその自覺に起ち上り、特に歐米列強との摩擦が増大すればするだけ愈々その盟主として東洋平和の確立こそは我が大和民族獨自の使命なりとの自任を深め、皇室を中心として舉國一致、本然の民族精神に生きんとする熱意は澎湃として起るに到つた。久しう間の種々なる經緯の錯綜の後に榮光に輝く週期が到来したわけである。誠に我が國精神文化史上燦然として貴き一期を劃するものといへよう。

◆かくて我々は在來の歐米を先進國なりとし之に追隨する生活態度から脱却して獨自の見地に立ち、東亞諸邦への認識を深め、その安定開発の百年の計の下に各自に課せられたる使命に即し、新しく日本民族的飛躍を試みなければならぬ。そしてそれが、今日に於て要望せられてゐるのであるが、此の編纂もその誘導的因素の一つとなり得てこそ初めて記念出版の眞の意義を有し得るに到るのである。處で國士の府に學ぶ諸君にそれを期待することは果して過當であらうか。切に諸君の心讀と工夫と發明とを希つてやまない。

◆最後に大朝大毎兩新聞社がその記事の轉載を快諾せられた事に對し深甚の敬意と謝意とを表する。(十二月三日)

昭和十二年十二月十日 印刷  
昭和十二年十二月十五日 發行 【非賣品】

編輯兼發行者 廣田廉夫  
印刷者 金澤英夫

神戸市兵庫合區旭通一丁目七八

發行所 兵庫縣立第三神戶中學校校友會

終

